

# こ ども の き も の (第3報)

女兒服のあきと留具に関する実態調査

荻野千鶴子・滝川 順子・大島 厚子

## The children's wears (Part 3)

The research on the actual condition of the little girls' clothes about openings and fasteners, snaps, buttons and other closing implements

by

C. OGINO, J. TAKIKAWA and A. OSHIMA

### 緒 言

第1報では、衣生活のしつけの立場から女兒服の実態調査を行ない報告したが、第3報では、服種の実態調査と同時に、しつけの立場を更に押し進めて、年齢別服種のあきと留具の違いによる脱ぎ着への影響を調べた。

更に、脱ぎ着の重要な過程である留具のかけはずしに着眼し、その実際的な様子および傾向を知る目的で、留具の実態を基にして前あきの服を作製し、これらに数種のスナップ・ボタンをつけた。そして、その服を着用させかけはずしの順序および所要時間について予備的実験を試みたので、その結果を報告する。

### 女兒服のあきおよび留具と脱ぎ着に関する家庭実態調査について

#### 1. 調 査 対 象

名古屋市およびその周辺における2才～5才の女兒の家庭

#### 2. 時 期

昭和41年11月～42年4月

#### 3. 方 法

冬・合服を対象として、特にしつけに関係があると考えられる、あきの位置と留具の種類の実態、更に、それらの違いによる脱ぎ着への影響と同時に各年齢との関係を知る目的で、所持服を調査した。調査形式は、本学学生・並びに幼稚園・保育園の各一か所の園児を通して調査用紙1010枚を配布し、母親の記入によるものを回収した。有効解答率は83.8%であった。

#### 4. 結果および考察

##### イ. 服 種 の 実 態

今回は、所持服の対象を調査時期と同一の冬・合服とした。その結果(表1)、最も多い服種は、ブラウスが全体の31.4%、次いでワンピース24.1%、スカート21.5%、ジャン

服種	年 令				計
	2	3	4	5	
ワンピース	27.33	22.97	25.42	23.34	24.12
ブラウス	28.57	30.27	32.07	32.12	31.39
スカート	16.15	22.16	19.24	23.46	21.50
ジャンパースカート	16.77	18.65	17.10	15.17	16.52
その他	11.18	5.95	6.17	5.91	6.46

表1 年令別服種の実態

単位は%

パースカート16.5%，その他，6.5%の順で，その他の服種としては，セーター，カーディガン，スモック，ベストなどがあげられる．これらを年令別に見ると，各年令ともブラウスが最も多く，5才を除く他は，上述と同傾向であった．いずれの年令にもブラウスが多いのは，この幼児期の発達的特徴として身体発育の旺盛な時期にあたるので，着丈の調節ができる組み合わせ形式が好まれたのではないかと考えられる．更に，組み合わせ形式のブラウスとスカートは，気温によって，容易に調節ができ，又，子供の生活が遊び中心である点からも汚ごすことが多く，洗濯も容易にでき，いたみのひどい部分は補修したりすることからも，上下を分けて管理できることは，非常に合理的で好ましい傾向と言えよう．

しかし，2才は，ワンピースとブラウスの傾向がほぼ同程度を示しているが，この時期は歩行も可能になるので総丈の短い，しかも，脱ぎ着が簡単で歩行の障害にならないすっきりした着付としたいため，比較的それらの条件に叶った服種としてワンピースの愛用者が多いと考えられる．

#### ロ．年令別脱ぎ着の可否

脱ぎ着が，幼児1人でできるか否かということは，服を体に纏ったり，脱いだりする動作のみでなく，むしろその難易はその過程として行われる留具のかけはずしに影響されることか大きいと考えられたので，これに重点をおいての結果をみることにした．先ず，1人で脱ぎ着できる者を可，できない者を否，着る・脱ぐの一方のみできるものを各々の可として，4種類に分けた．その結果(図1)，

2才ではお手伝いなしに完全に1人で脱ぎ着のできる者は，6.2%で全くできない者が半数以上の65.2%であった．又，脱ぐことのみできる者は，着ることのみできる者の約5倍の23.6%であった．これは，着ることより脱ぐことの方かしやすい結果の現われであると考えられる．この点について

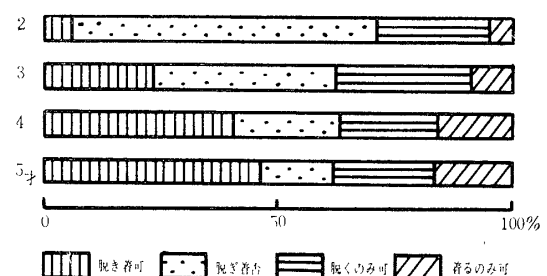


図1 年令別脱ぎ着の可否

では，山下氏，平井氏並びにハーロック氏も指摘している．更に，3才では，脱ぎ着のできる者は23.7%で2才の場合に比べその変化は急激である．又全く不可能な者が，2才の場合の約%にあたる39.0%となり，4才では，脱ぎ着のできる者は，40.7%，5才では，46.4%と，年令の増す毎に，徐々に増加し，約半数に達するが第1報の報告では，4・5

才になると殆んどの者ができるようになっていた結果からみて冬服より、夏・合服の方が着やすいと考えられる。更に、脱ぎ着の習慣は、多くの場合、母親のしつけに対する考え方が反映されると思われるが、2才頃からは何でも自分でやろうとする気持ちが盛んとなり、更に子供の自立心も盛んになってくるので、衣生活においてもこれを正しく育ててやる心がまえが必要であろう。脱ぐことのみできる点では、2才も5才もほとんど変わりなかった。この結果については、解答する母親の十分な理解がなされていたかどうか疑問に思われる。

#### ハ. 各服種の年令用途別脱ぎ着の関連

服種が脱ぎ着の可否に及ぼす影響もあると考えられるので、利用度の比較的多いワンピース、ブラウス、スカート、ジャンパースカートを日常着、外出着に区別しそれらの脱ぎ着の状態の結果は、次の様である(図2)。

各年令とも、最も脱ぎ着の困難な服種はワンピースであり、2・3才で約80~90%、5才では、約43%の高率を示す。次いで困難であるのは、ジャンパースカートである。反対に比較的容易な服種は、ブラウス及びスカートである。ブラウスの場合、脱ぎ着のできない者が、2才は52.1%であるが、5才ではわずかに0.5%になりその差は非常に大きく、できない者は殆んどなくなっている。又反対に、できる者2才が8.0%、5才64.2%と上昇しているが、

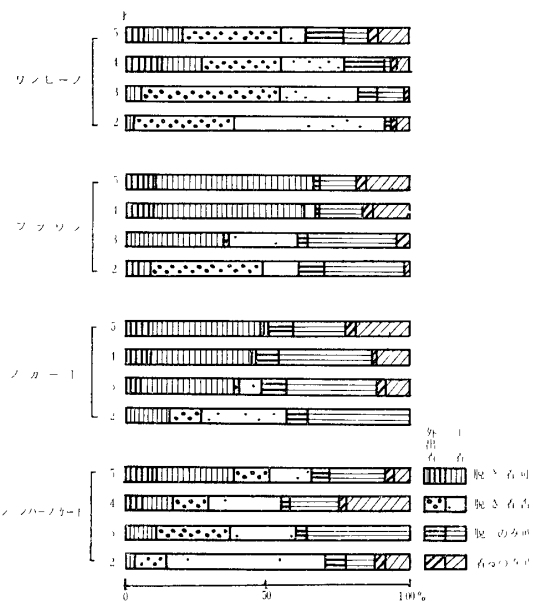


図2 各服種の年令用途別脱ぎ着

この傾向は結果的に同じである。更に、用途別にみると、日常着と外出着とでは年令の進むに従って、各服種とも日常着は脱ぎ着の可能な者が増加しているのに反し、外出着においては、脱ぎ着の不可能な者が比較的多い。特に、それはワンピースにおいて顕著である。これは、外出着の特徴であると考えられる装飾やデザイン上凝ったものが多いために、脱ぎ着がしにくくなるばかりでなく装飾の持味を生かすために規制されたあき・留具の位置や種類などが原因していると考えられる。この点については、平井氏も述べているように、3~4才になると、美意識も芽ばえ、それに伴って、はっきりした要求も明らかとなり、女の子としての主張や願望も育つてゆくの、満足のゆくようよく配慮された装飾的な服装をも合わせて検討してゆく必要がある。また、「脱ぐのみ」のできる顕著な服種はスカートである。これは、他の服種と構成上大きな相違があるが、客易に足から着ることができ、年令の少ない者でも比較的簡単に着られるからである。

#### ニ. 服種とあきの種類

脱ぎ着の可否は、服種とそれらの服を構成する要素であるあきにも関連するので、あきの種類と服種についてみると(図3)、ワンピースでは、後あきが59.8%で最も多く、前あきは、後あきの約1/2であった。この結果は第1報で報告した夏・合服の既製服の実態調査の結果におけるワンピースでは、後あきが72.0%で圧倒的に多かった事と同じ傾向を示し

ている。又、ブラウスでは前あきが86.0%で高率を示した。また、ジャンパースカートもワンピースと同じく、後あきが43.3%で最も多かった。

#### ホ. 服種と留具の種類

次に、あきの位置と留具の種類が脱ぎ着の重要な要素になると考え、これを調べた結果(図4), ワンピースでは、ファスナーが49.4%で最も多く、次にボタン23.8%, スナップ16.2%の順となり、これは第1報の結果と同傾向である。ブラウスでは、スナップが59.3%で最も多く、次いでボタンの32.5%でファスナーは、6.0%でごくわずかである。ジャンパースカートでは、ワンピースと同様な傾向でファスナー44.0%で最も多く、ボタン26.0%, スナップ22.4%でほぼ同率の傾向である。

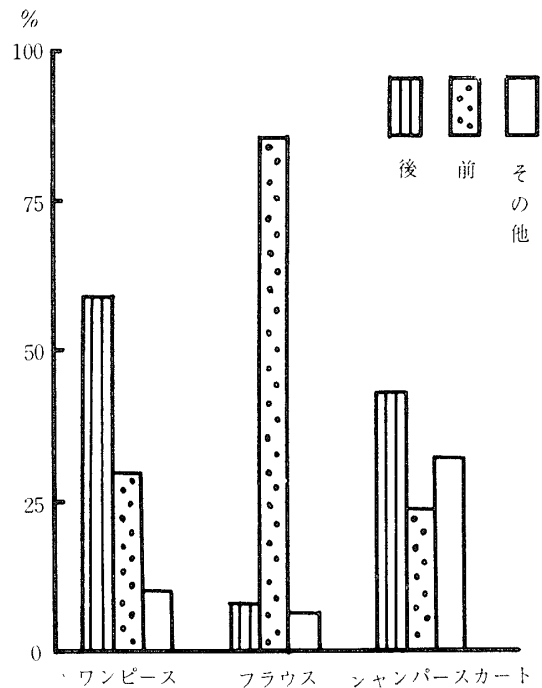


図3 服種とあきの種類

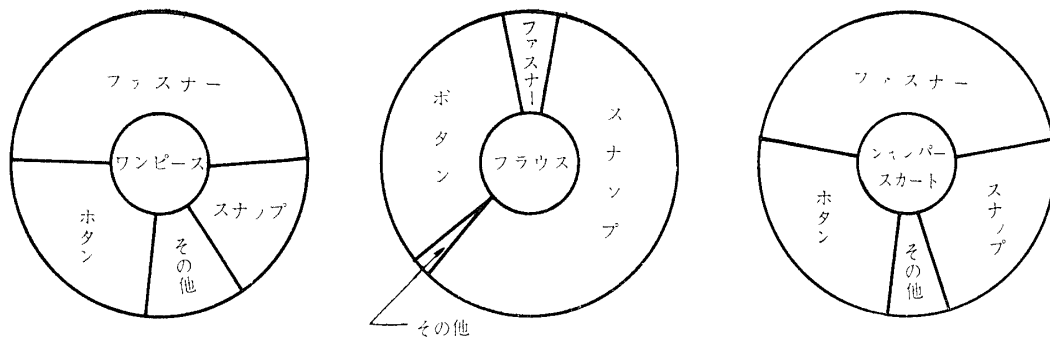


図4 服種と留具の種類

以上の傾向は、あきの場合と同様、服の装飾性と大いに関係していると考えられるので、今日言われている装飾過多化現象の下では、ユニホームなどの特殊な衣服を除いて、一般の外出着・日常着など季節的な差異は少ないと思われる。

#### ヘ. 留具の種類と脱ぎ着の関連

年齢別留具の種類と脱ぎ着の関連の結果については(図5), まず、ワンピースでは、留具の種類として最も多かったファスナーは、脱ぎ着の不可能な者が2才で91.7%とその大部分を占めるが、5才になると67.8%に減少している。更にボタンにおいては、2才は全く不可能であるが、年齢の

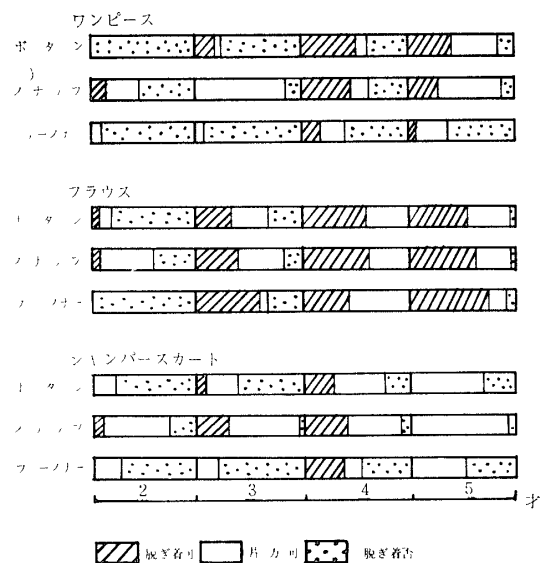


図5 留具の種類と脱ぎ着の関連

進む毎に、3才が71.4%、4才が23.7%で、5才になると17.4%にまで減少し、ファスナーの場合と同傾向であるが、その割合は非常に少くなっている。更に、3・4才の変化が急激であるが、他の留具に比べて、ボタンは指先の巧緻性が関係しているものと考えられる。スナップでは、2才で57.1%が、5才では12.5%と減少してボタンより、はめやすい結果を示している。またブラウスでは、ボタンは2才で不可能な者80.0%が5才になると38.5%まで減少し、ワンピースに比較してその減少率が大きくなっている。これは、後あきの多かったワンピースに反して、ブラウスは前あきが多かった結果と考えられる。

以上、3種の留具の中で各服種とも最もかけはずしの困難な留具は、ファスナーであったが、この理由として、ファスナーの用いられる場合のあきの位置が後あきであった点があげられる。又、ファスナーのあげおろしには、他の留具より多少力が要ることや、下着の一部がくいこみやすいことや、薄地の材質などでは容易に移動させにくいことなど、他の留具と異なる困難性を指摘することができると思われる。更に、年齢的な傾向については、3・4才の変化が顕著であった。

#### ト. 留具の間隔

留具の種類が脱ぎ着に及ぼす影響についてみたが、留具を取り上げた場合、必然的に着丈に伴う留具の間隔並びに材質・デザインに応じた穴の方向及び始末が問題になるが、脱ぎ着に関連があると考えられるスナップ・ボタンについての間隔のみについて調べた(図6)。間隔は、年齢の増す毎に着丈も増す傾向にあるが、スナップについてみると、最も多いのが、2才では、3~4cm及び7~8cmが共に32%、3才では、5~6cmが47%、4才も同様5~6cmで44%、5才で、7~8cmが35%とほぼ着丈に準じた間隔である。又、ボタンについても、スナップの場合とほぼ同様な傾向を示した。

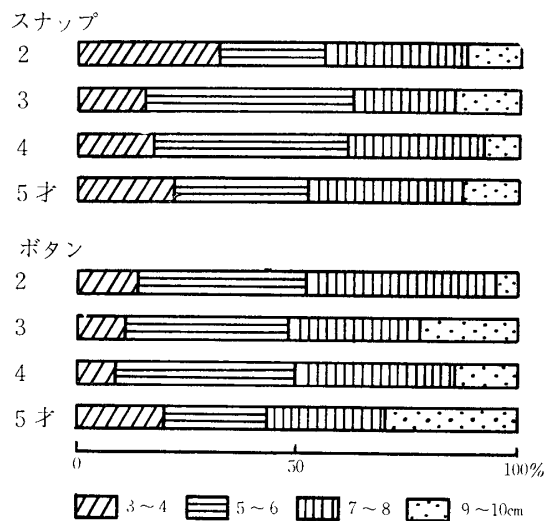


図6 年齢別の間隔

#### スナップ・ボタンによるかけはずしの予備的実験について

以上の家庭調査の結果、脱ぎ着は服種によるあき及び留具に関係のあることが明らかになったので、これについて更に追求したいために脱ぎ着におけるかけはずしの予備的実験を試みた。

##### 1. 実験対象

名古屋市内A幼稚園の3才~5才の男女児63名。

##### 2. 時期

昭和42年4月~5月

##### 3. 方法

実験着として木綿・テトロン混紡のギンガムにて、それぞれ年齢の標準寸法によるドレメ式原型を用いて前打ち合わせの上衣を作製した。留具は(表2)に示すように各々直径・厚さの異なるスナップ3種、半球型ねりボタン2種、および円形平型貝ボタン2種の計7種類

種類	直径mm	厚さmm	型
1 2 3	スナップ	6	[Diagram of a snap fastener]
		7	
		9	
4 5	ねりの丸ボタン	10 — 8	[Diagram of a round button]
		11 — 6	
6 7	貝ボタン	12 — 2	[Diagram of a shell button]
		15 — 2	

表2 実験留具の種類

のものをそれぞれ4個ずつつけた。またボタン穴は横穴かがりにした。これらの上衣を各園児に着用させ、1種類の留具について「かける」「はずす」を各々3回ずつ7種類のものについて行い、時間の測定をするとともに順序などについて観察記録した。

#### 4. 結果および考察

##### イ. かけはずしの順序と方法

かけはずしの順序としては、「上から下へ行なう」、「下から上へ行なう」、「順序不同で中途から行なう」の3種に分けて観察した。(図7)、年齢別・留具別に、「はずす」場合についてみると、3才では「上から下へ行なう者」が約40~50%、「下から上へ行なう者」40~60%で比較的その差は少ないが、4・5才では留具の種類によって、「上から行

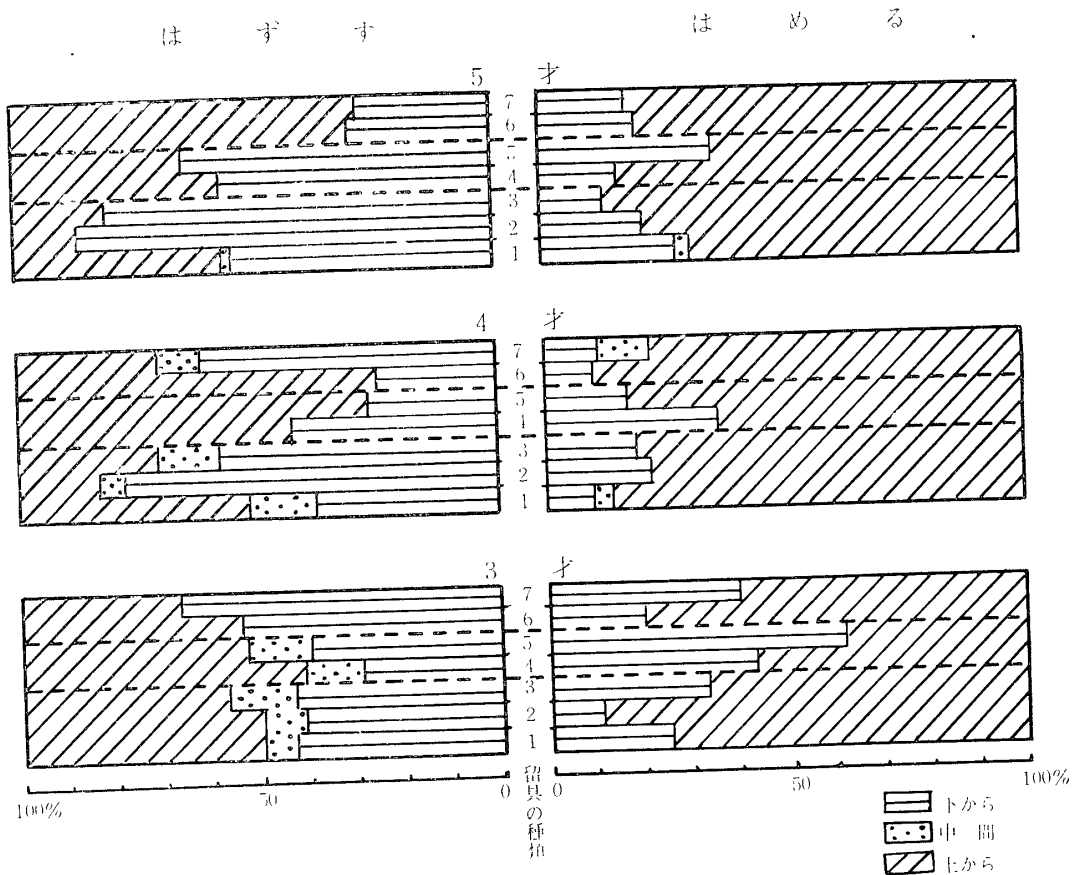


図7 かけはずしの順序

なり者」と「下から行なり者」の差が著しい。これは3才では、留具をあつかいこなれていないために、最初行った方法を変えることが少なく、友だちのを真似たり、あるいは母親に教えられたそのままの方法で行うためであると思われる。また反面5才になれば留具の大小、形の相違によるつまみにくさなどを克服するために、つまみ方や順序を変えたりする創意など知的発達の様子が観察され、これが差を大きくした原因とも考えられる。また更にスナップでは、「下からはずす者」が50～87%の数を示したが、これはみごろを両手でつかんで引張ってはずす者が多かった結果であると思われる。次にはめる場合では、各年令とも「上から」がほぼ60%以上の高率を示し、4・5では3才にくらべて「下から」が減少しているがこれは習慣化の傾向のあらわれであると考えられる。

つぎに「かけはずし」の方法を、「引張って行なり」「手さぐりで行なり」「見て行なり」の3種類に分けて観察すると、はずす場合、スナップでは「引張ってする」が88%で圧倒的に多く、次に「見て行なり」9.3%、「手さぐり」は6.3%であった。スナップの場合は強く引張ればはずれるので、比較的年令の少ない者にこの方法が多く見られた。なおボタンでは「見て行なり」が各年令とも70%以上の高率を示している。

次にはめる場合では、「見て行なり」が圧倒的に多く、スナップ69%、ボタン79%であり、この反面、困難であると思われる「手さぐりで行なり」は、スナップ24%、ボタン21%であり、予想以上に多かったがこの傾向は5才にのみ多くみられた。

ロ. かけはずしに要する時間

次に所要時間では(表3)、何れの場合においても一般的に、「はずす」が「かける」

		留具の種類		年令							
		1	2	3	4	5	6	7	8		
はずす	3	7.7	8.2	4.4	14.9	34.8	34.9	34.5	44.5		
	4	7.7	4.3	4.8	17.5	25.6	27.2	17.5	21.5		
	5	5.7	8.2	4.6	17.5	15.1	28.8	18.3	22.9		
はめる	3	54.8	85.9	93.2	66.6	63.7	82.7	78.3	60.0		
	4	41.2	37.6	53.4	56.8	55.0	35.2	48.2	46.7		
	5	32.8	26.1	23.1	44.3	34.4	49.9	34.0	32.7		

表3 かけはずしの所要時間

単位は秒

より明らかに速くできる。また年令別では、年令の少ない程その差が著しい。これをまず留具の種類別についてみると、スナップでは、はずす場合5～8秒で大差はないが大きいスナップの方がやや速くなっている。また、はめる場合3・4才では、小さいスナップの方が速いが5才では全く逆の現象が現われている。これは指先のサイズの大小と巧緻性とも関連する点ではないかと考えられる。

半球のボタンでは、はずす場合小さい方が速いが、これは引張ればはずれ易い事の影響ではないと思われる。またはめる場合では反対に大きい方が速くなっている。これははめる時に、幼児はボタンを指先でつまみ1つ1つ穴に入れこむので、大きい方がつまみ易いためであると考えられる。更に平型ボタンでは、はずす場合は、ほぼ半球ボタンと同様に

小さい方が速く、はめる場合も同様大きい方が速くなっている。

さらにスナップとボタンを比較すると、スナップの方が速くなっているがこれは、前にも述べたように引張ってはずした結果である。また、半球と平型のボタンでは、はずす場合は平型より半球ボタンの方がやや速いが、はめる場合は反対に平型ボタンが速くこの傾向は特に大きい場合に顕著に現われた。

#### IV 総 括

アンケート用紙による家庭調査の結果について。

1. 幼児が多く着用している冬・合服のうち、しつけの上で脱ぎ着の可否に関連の深いものは、ワンピース・ブラウス・スカート・ジャンパースカートの4種であった。
2. 一人で着られないものは、各年令を通じてワンピースが最も多く、これはその殆んどが後あきで、留具はファスナーが最も多く、ついでボタンであった。
3. 最も着やすい服はブラウスで、これはその殆んどが前あきでスナップであった。  
次に「かけはずし」の実験結果は、
  1. スナップは「かけはずし」ともに、ボタンよりたやすく速くできる。
  2. 半球のボタンは、すべり易いため、「はずす」のは容易であるが、小さいものは非常につまみにくく、ボタンとしては、平らなもので直径1.5cm位のものがとめ易い傾向であった。
  3. 「かけはずし」の可否については、2才は殆んどの者が不可能な状態であるが、3才になると急激に可能性が増してくる傾向であり、5才になると、できる者とできない者の差がその手つきなどにも顕著に現われていた。
  4. 2才児の留具としては、ボタンよりスナップの方が適していると考えられるが、この場合小さすぎると扱いにくく、反対に大きすぎると力の関係でとめにくいので、大きさに留意する必要がある。

以上、かけはずしによる幼児の実態について予備的実験を試みたが、かけはずしの難易は、留具の種類、服地の材質、ボタンホールの方法、間隔および打合せ方などにも左右されると考えられるので、今後その方面の実証を試みたいと思う。

最後に、この実験に御助言下さいました東京家政大学教授、山下俊郎先生に厚く謝意を表しますとともに、調査および実験に御協力下さいました幼稚園・保育園の皆様や本学学生の方々に深く感謝します。

#### 参 考 文 献

- 1) 山下 俊 郎 : (1959) 改訂幼児心理学
- 2) 中 西 登 : (1959) 児童心理学
- 3) 平 井 信 義 : (1960) ママの手帖
- 4) 大 伴 茂 : (1960) 実験児童心理学
- 5) 望 月 武 子 : (1966) 乳幼児の心理としつけ, 家庭科教育
- 6) 荻野千鶴子他 : (1967) こどものきもの(第1報) 女児服に関する実態調査, 名古屋女子大学紀要, 13
- 7) Elizabeth B. Hurlock 松原達哉, 牛島めぐみ訳 : (1968) 子供の発達と育児
- 8) 石田恒好編 : (1968) 発達心理学